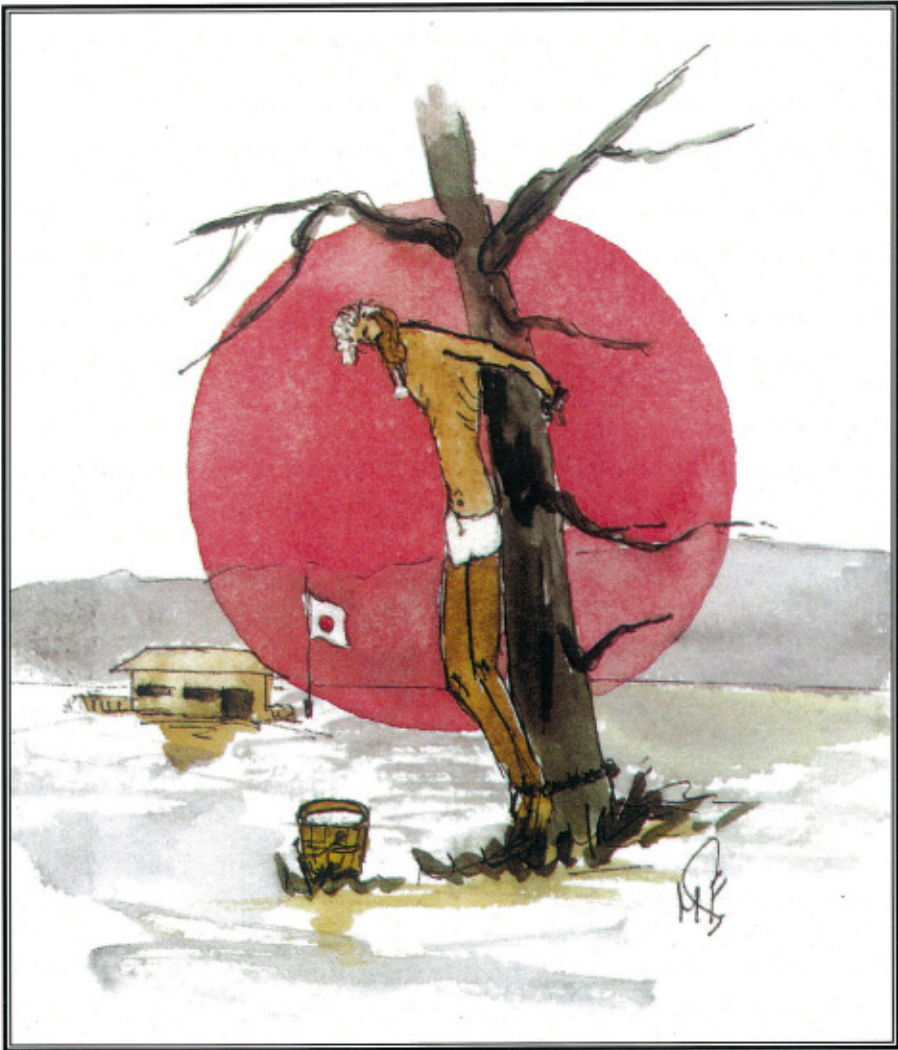


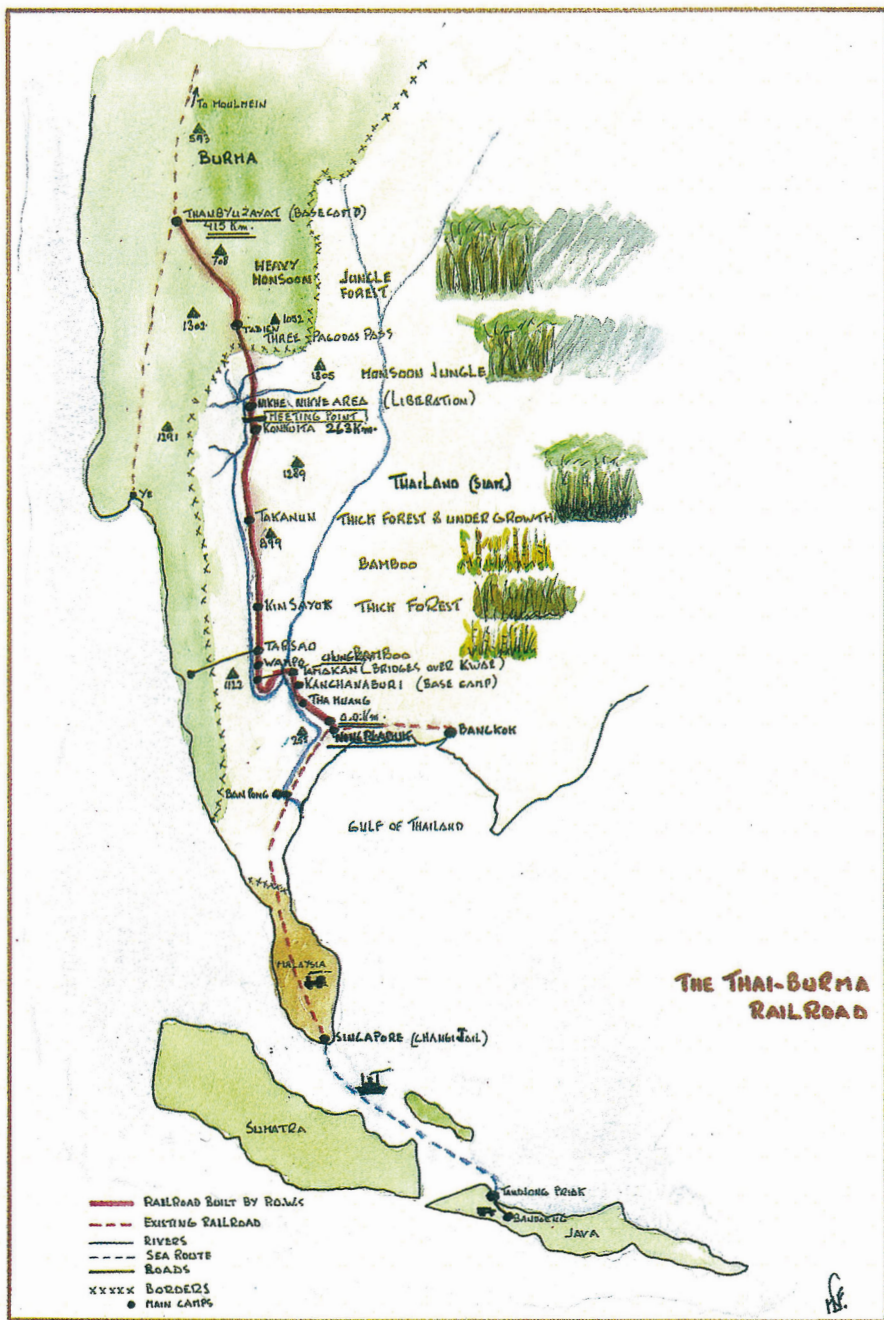
Lest we Forget

忘れないように

— 日本軍の捕虜として生きる —



フレッド・シーカー 著
小林 皓志 訳



‘ 忘れないように ’

戦争捕虜の信条

ほとんど死ぬような経験をするまでは、決して生きたことにはならない。
自由と生命のため、及び自由を求めて戦ってきた者には、保護されている
者には決して分からない生命の価値を有する。

私の妻であり友であるエリザベスへ、
生きていてくれて、ありがとう。

私を支え、励ましてくれた人たちにも
感謝いたします。

‘忘れないように’

—— 死の鉄道 ——

連合軍捕虜 (1942 - 1945) による泰緬鉄道建設中、
日本軍による残虐行為を描いたスケッチ集

—— フレッド・シーカー
(Fred Seiker)

いかなる方法においても、本書の全部または一部及び挿し絵、写真の
無断複写複製 (コピー)、掲載を著者の許可なくおこなうことは著作権
侵害となります。

Copyright© M. F. Seiker
Worcester U.K.

目 次

	ページ	絵 No.
データ	5	
まえがき	6	
著者より	7-8	
著者について	9	
馬面	10	1
強制労働	11	2
拷問—木に縛る	12	3
拷問—親指を吊す	13	4
拷問—角材の角部に座る	14	5
拷問—水攻め	15	6
拷問—大きな石を持ち上げる	16	7
拷問—手を縛りひざまずく	17	8
斬首	18	9
クワイ川鉄橋の杭打ち	19	10
土嚢運び	20	11
盛り土作り	21	12
熱帯性潰瘍	22	13
コレラ発生	23	14
恥辱	24	15
むち打ち	25	16
竹のベッド	26	17
日本軍が撤退した朝—1945年8月18日	27	18
ジャワ 1942年—タイ 1945年	28	19
1945年英国空軍爆撃後のクワイ川鉄橋	29	20
脱走兵の処刑—1945年8月16日	30	21
カンチャナブリ共同墓地の訪問—1983年	31	22
ほほ笑み	32-35	23
サバイバルキット	36	24
復旧後のクワイ川鉄橋	37	25
クワイ川鉄橋を再訪—1983年	38	26
絵の説明	39-44	

死の鉄道のデータ

イギリスの記録によると連合軍捕虜：61,700人

その内、イギリス：30,000人

オーストラリア：13,000人

オランダ：18,000人

アメリカ：700人

日本側の報告では捕虜：68,888人

死者：18,000人

全捕虜に対する死者の割合：約30%

さらに多くの者がジャングルの中の浅い無名の墓の下に取り残された。
何千人もの者が肉体的、或いは精神的な障害に苦しんだ。

鉄道の全延長は415km (260マイル)

(タイのノンプラドックービルマのタムビサヤ間)

工事は1942年6月に始まり、1943年10月17日に
タイのコンクイタで終わる。

鉄道全線をわずか16ヶ月で建設する。

上記の数値によると、線路の長さ23m (75ft) 毎に捕虜1人が死んだことになる。

まえがき

私は、このまえがきを書く機会を与えてくれたフレッド・シーカーに感謝するとともに、ウースターシャー州の陸軍、海軍兵士及び航空兵の家族協会並びに軍事援助会の会長としてこれを記述する。

我々は1995年を、ヨーロッパ戦勝及び対日戦勝の50回記念日として思い起こし、両記念日とも戦争を経験した者にとって、痛ましい記憶に再び火をつけ、強力な感情を引き起こすものである。それはまた、若い世代の人たちにとっては、今日の自由を我々全ての者が享受できるのは、多くの人々の犠牲があったことを少しでも学ぶ機会でもあった。

この小さいけれど、重要な絵の本は、それを見るすべての人たちにとって深みのある影響を与えるであろう。絵はフレッド・シーカー及び彼の戦友が毎日経験したことがらを明確に表してはいるが、世界的には実際はほとんど知られていないし、また理解されていない。フレッドは美術家としての資格は持っていないが、彼はただ自分で見たこと、経験したことを描いている。私は、この非常に特殊で、個人的な記述が奴隷労働者として強制労働させられた人たちの英雄的行為と、人間に対する恐るべき残酷な行為の両方を思い起させてくれることを望む。後者は、我々の現代世界においてもその表面下におそらく、危うく潜むものである。

ダーモット B-H- ブランドル
元近衛兵第1連隊 准将

著者より

1995年8月の対日戦勝50周年記念の時、私はウースターのベビア・ビビス・ギャラリーで‘忘れないように’というタイトルで展示会を開いた。水彩画のスケッチは、日本軍の捕虜としての1942年から1945年の間、記憶にもとづいて個人的な経験、または目撃した事件を表わしたものである。私はスケッチしたものを集めて出版の形でまとめるように数多くの人たちから促されてきた。従って、絵の中に込められたメッセージは忘れられないものである。

泰緬鉄道の戦場舞台がいろいろな政府によってほとんど意図的に無視されたやり方に、私は長い間、静かな怒りを抱いていた。あの恐ろしい期間中に本当に何が起こったのかを、私は人々、特に若い人たちに示したかった。もし私が是が非でも妥協、譲歩という危険性に対して彼らに注意を喚起できるならば、恐らくこのような恐ろしい犯罪は繰り返されないであろう。私の展示に対して大衆の受けとめ方は、私が期待した以上のものであった。感情、悲しみ、またしばしばあからさまな怒りを目にすることは、私にとって非常に心を動かされる経験であった。恐らく本の形で自分のスケッチを編集することは価値のある仕事であろうと私は確信した。編集しようとしたもう一つの動機は、地方のマスコミが関心を示してくれたことだった。私の話と展示品は新聞、ラジオ及びテレビで広く報道された。

私のスケッチに描かれている残虐行為は、平然として或いは単なる慰み物として日本人が行った正に残酷な行為である。多くの連合軍捕虜が現在なお、精神的及び肉体的な障害に苦しんでいる。平和で文化的な生活を50年してきた後でも、悪夢は続いているのである。私の考えでは、死の鉄道で生き残った者は誰もが特別な人間なのである。このような人間は、ある一人の人間によって最も恥ずかしめを受けるような行為を経験し、また他人に対して行っているのを目撃している。同時に、文明人の不屈の精神力も感じている。変な言い方かもしれないが、泰緬鉄道建設を経験し、また生き残ったという特権を感じるのは、こういった理由からである。私は最高の状態での人間性を見だし、同時にどん底状態での人間性も見てきた。私は文明生活の状態にある人間が、自尊心や他人への思いやりを無くして、乾いた土のように碎けていくのを見てきた。しかし私はまた、小物の人間、平凡な背景を持った人間が、恐れを知らないリーダーや精神力を持った大物として突然出現するのも見てきた。



繪1 馬 面



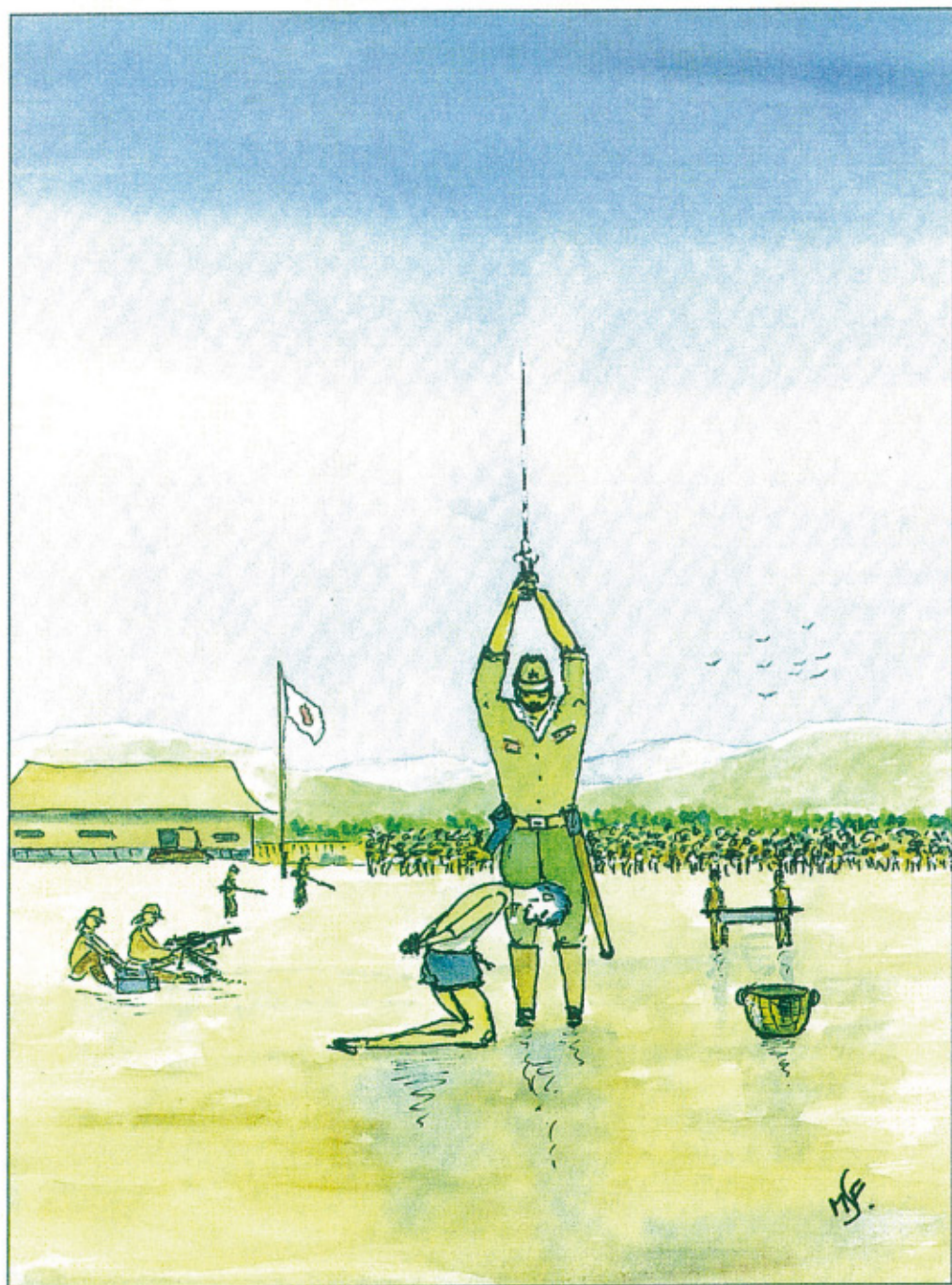
絵2 強制労働



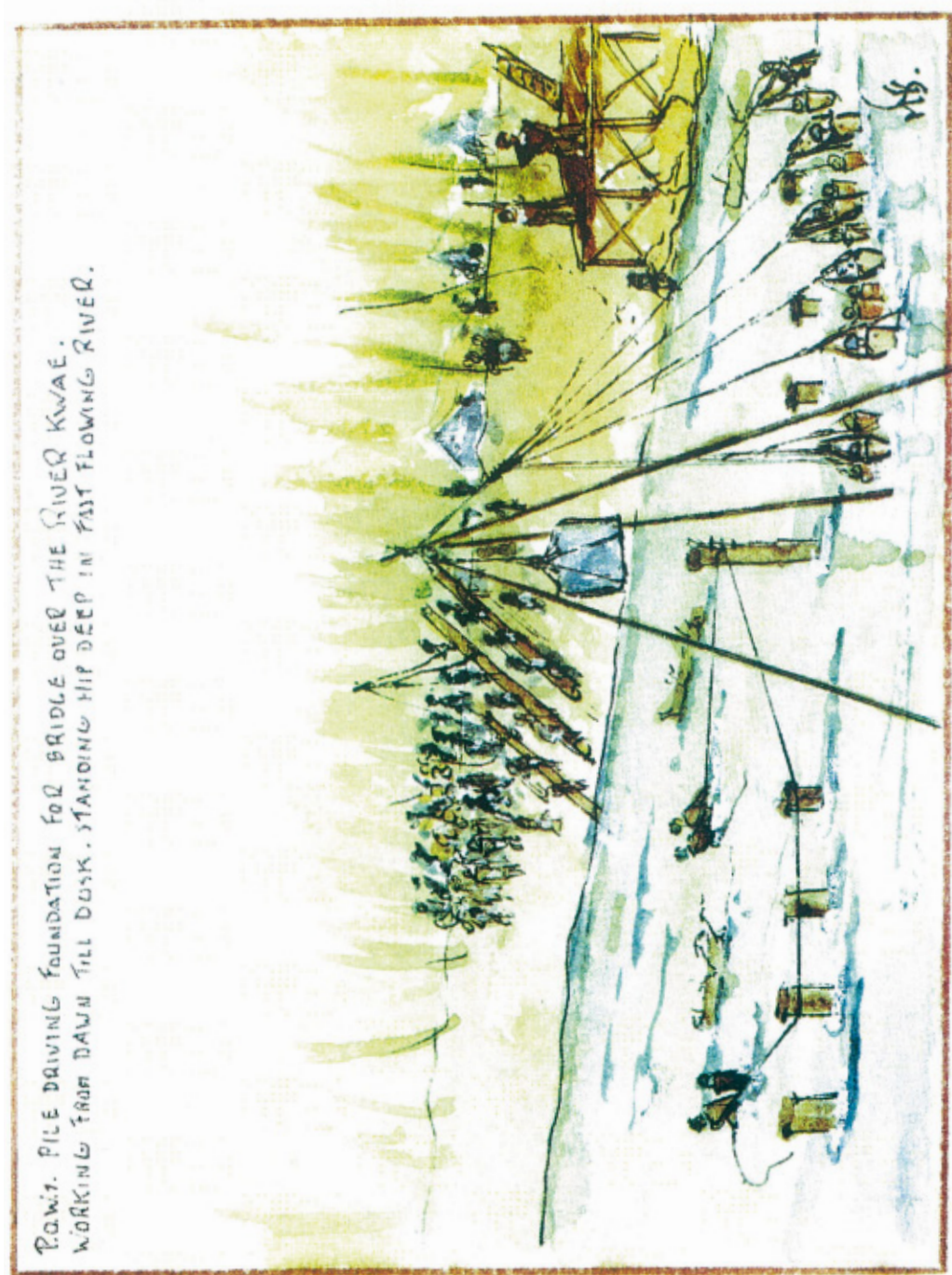
絵5 拷問一角材の角部に座る



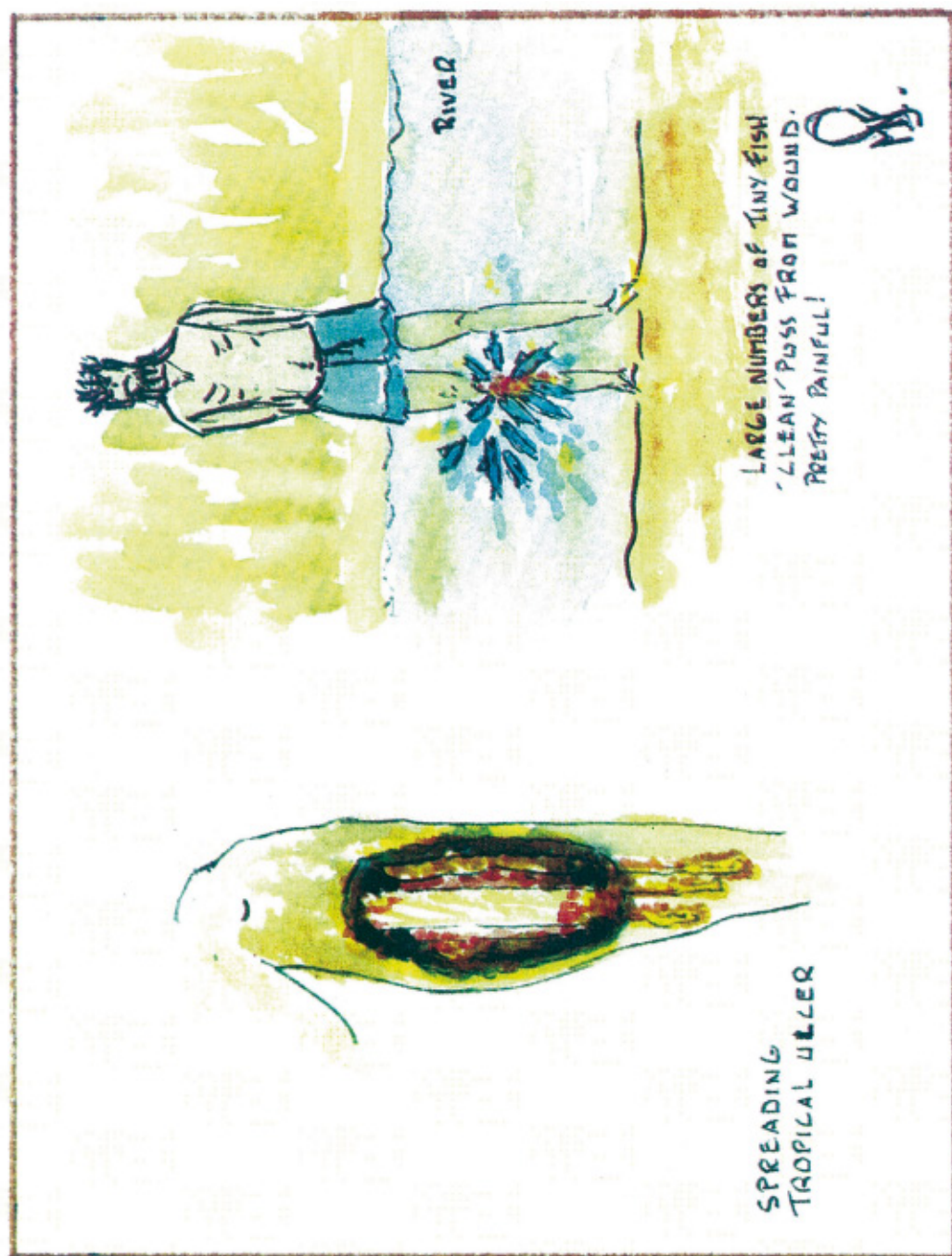
絵6 拷問—水攻め



絵9 斬首



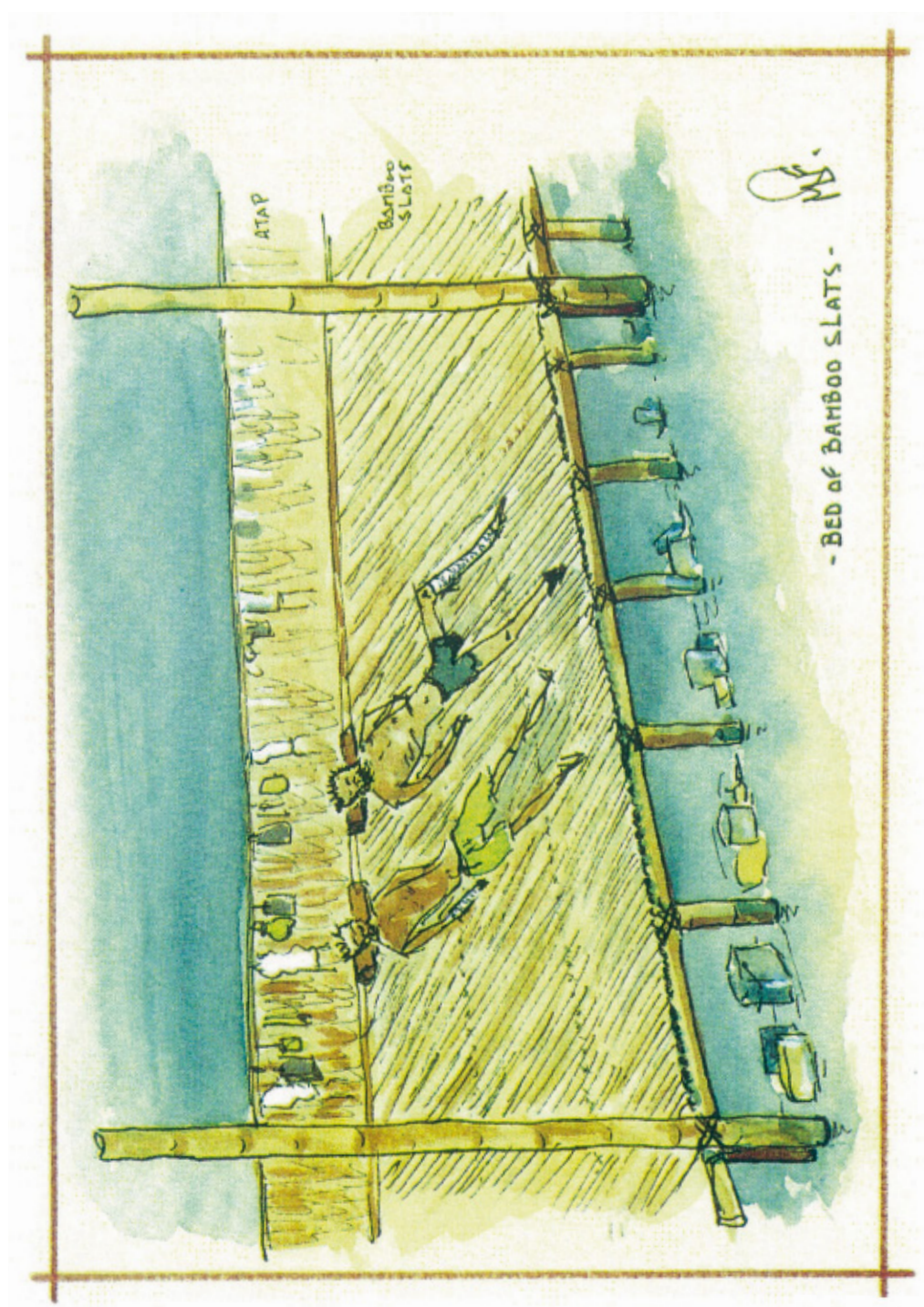
絵10 クワイ川鉄橋の杭打ち



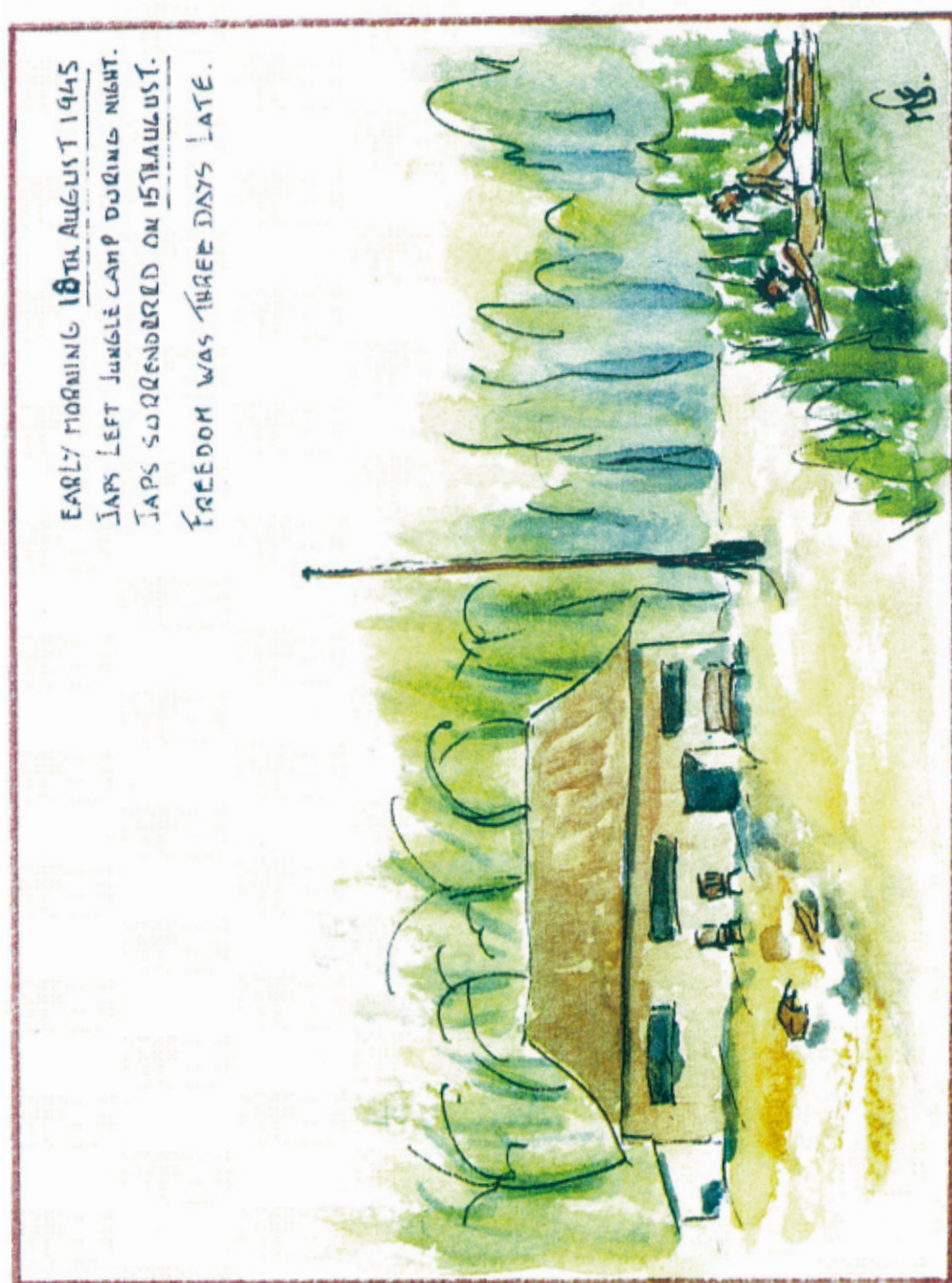
繪13 熱帶性潰瘍



絵14 コレラ発生



絵17 竹のベッド



絵18 日本軍が撤退した朝—1945年 8月 18日



絵21 脱走兵の処刑

IN HONOURED REMEMBRANCE OF THE FORTITUDE AND
SACRIFICE OF THAT VALIANT COMPANY WHO PERISHED
WHILE BUILDING THE RAILWAY FROM THAILAND TO BURMA
DURING THEIR LONG CAPTIVITY
THOSE WHO HAVE NO KNOWN GRAVE ARE COMMEMORATED
BY NAME AT RANGOON SINGAPORE AND HONG KONG AND
THEIR COMRADES REST IN THE THREE WAR CEMETERIES
OF KANCHANABURI CHUNGKAI AND THANBYUZAYAT
*I will make you a name and a praise among all people of the earth
when I turn back your captivity before your eyes. saith the LORD*



Visit to Kanchanaburi Cemetery in 1983

絵22 カンチャナブリ共同墓地の訪問—1983年

二人の日本兵ともライフルを構えたまま、驚きと疑いの目で我々を見た。彼らの目は静かにしている男達のグループにさっと向かった。顔はやせこけ、湿ったぼろ着れが骨からぶら下がっている男達へと向かった。我々は彼らの幸福を脅かすものではなかった。だが、彼らの目は恐怖を示していた。彼らが理解できない何かの恐怖を。私は、その時、彼らに対して哀れみを感じた。

その声は、戻ってくるジャングルの響きと穏やかに再び混ざり合っている時、日本兵が突然カッチと音を立て、"こらっ、こらっ"と叫んだ、そしてぴかぴか光る威嚇的な銃剣で目に入る全ての者を脅した。

彼が私に近づいた時、私はほほ笑んだ。ほほ笑みは彼を怒らせた。では結局、ほほ笑みに対してはどう戦えばよいのか。ライフルの台尻が私の体にドスッと入ってきた、そして私は地面に突き倒された (絵 23)。私が彼の顔を見上げると、にやにやしており、激しい怒りが通りすぎ、そして馬鹿でかい銃剣が私の喉を狙った！しばらくして、そのジャップはゆっくりとした足取りで去って行ったが、地面を蹴りながら、何かひとりつぶつぶ言っていた。

私の仲間は私の足を引きづり寄せた。仲間たちの目は、押えつけられた怒りで涙ぐんでいた。その時、私の胸が痛みでズキズキしているのが分かった。"この無粋者が。くそったれ"と誰かがつぶやいた。私は、ほほ笑んだ。その表現は全く的を得ていた。



絵23 ほほ笑み

絵5：拷問一角材の角部に座る。この拷問は、また通りがかりの番兵に敬礼をするのを忘れたような小さな悪行に対する罰であった。断面が三角形の木材が、茶箱かそのような物に釘付けにされていた。被害者は足を箱の端から丁度垂らすようにして、その材木の上にひざまずかされた。膝とすねの骨が鋭い材木の角に当たるようになる。かなりの重量の大きな石を抱きかかえさせられて、膝とすねの骨に重量がますます加わってくる。通常、3～4時間が我慢の限界だった。その後、ジャップは犠牲者から材木を除けてやった。膝の皿の損傷は長期間続いた。

絵6：拷問一水攻め。これは憲兵隊特有のものだった。これは通常、"白状"させるために使われた。スケッチが示すように、水が犠牲者の腹の中に強制的に入れられる。腹の膨らみだけでもその苦痛は激しかった。その膨れあがった腹の上に乗って跳び上がる様子は筆舌に尽くし難い。ついでに、頭をけ飛ばされ、拷問する側の慰み物となる。多くの者がこれ以上の拷問から逃れようと"白状"した。その白状自体が更に処罰を引き起こした。

絵7：拷問一大きな石を持ち上げる。必ずしも悪行の結果というわけでもなく、これは慰み物の一つとして、ジャップの番兵には非常に盛んであった。これは休憩時間中に通常、出まかせに行われた。ある捕虜が選り出され、気を付けの姿勢を取らされた。気を付けの姿勢のまま、手の中に重い大きな石が置かれたものだ。ジャップは、それから銃剣で捕虜の背中を突くか、後ろから足を蹴ったものだ。その結果、捕虜がよろけるとジャップからいつも大きな浮かれ騒ぎが起こり、捕虜が報復するのを極端に控えるようになった。

絵8：拷問一手を縛りひざまずく。小さな悪行に対する処罰。これは足の下部に血が回らなくなり、膝の皿に大きなストレスを受け、後の生活に問題を起した。

絵9：斬首。さまざまな理由で捕虜の斬首が行われた。これはいつも、日本人の見せ物のネタとなった。収容所全体がこの処刑を見せつけられ、いつも、武装した番兵の威嚇の下にあった。いわゆる日本人の持ち物を盗むとか、ジャップの将校を侮辱したとか、或いは脱走しようとしたら、この残虐行為を実行するのに十分な理由となった。捕虜の斬首は、首切りの'技'を練習する一つの方法として、しばしば行われた。刀の最初の一振りが決定的なものでなかった時には、目撃者は恐怖を表わした！武士道の掟は、弱い者や罪のない者には親切で慈悲深くなければならないという榮譽を特に含んでいるのだが。

絵 10：クワイ川鉄橋の杭打ち。作業は朝早くから夜遅くまで行われた。この作業の各工程は全て人力のみで実施された。一人の日本人の番兵が堤防の上に立ち、"引っ張れ、ゆるめー"の操作のリズムをメガホンを通して指示したものだ。捕虜たちは一日中、腰まで水につかりながら立っていた。川土手からの掛け声は、どんな問題が起ころうとも情け容赦はなかった。木の幹や他のがらくたはいつも危険物だった。川の流れが急なので、そういった物が、多くの事故の原因となったり、時には致命傷になったり、またそれは番兵の慰め物にもなった。

絵 11：土嚢運び。それ自体は拷問ではなかった。しかし、栄養不足と病気の体でやるとなると、それはほとんど不可能な仕事だった。それに加えて、モンスーンシーズンでぬかるみの滑りやすい坂があり、泥の中に潜む危険な竹のとがった物などで、この仕事はこの世の地獄となる。50kgの荷物を背中に背負い不運にも転んだ者は、すぐさま番兵のライフルの台尻で殴打されるか、又は手厚い鞭を受けることになった。

絵 12：盛り土作り。これは捕虜たちのほとんどが行う主要な仕事であった。鉄道の盛り土作りである。これは、夜明けから日暮れまでの仕事で、ジャップによる確実な残虐行為と殴打が行われた。何故なら、それは奴隷労働者から更なる成果を上げようとする彼らのやり方だったからである。毎日、労働者は組に分けられた。各組はグラウンドコンディションに関係なく、即ち、ある組が他の組より仕事が楽でも、その日に達成すべき同一の仕事が与えられた。与えられた仕事に対して不可能だと抗議したら、1、2名の番兵によって徹底した殴打を受ける結果となった。たまたま、もし一つの組がその日の要求された仕事を完遂するようだったら、翌日は全ての組に更に仕事が追加された。絶えず、うまくやったと言われるような状況は決してなかった。土はバケツに入れて一人で運ぶか、二人で間に合わせの担架のような物で運んだ。

絵 13：熱帯性潰瘍。あらゆる炎症の中でもっとも恐れられたものである。わずかの搔き傷でも恐ろしく腐っていく病気である。竹による傷は通常、拡散性の潰瘍である。もちろん、捕虜にとって手に入るような薬は全く無く、傷口をほどよく清潔にする唯一の方法は鋭いスプーンでこすり取ることである。これは犠牲者の手と足を押さえ込んで通常行われた。一方、医療担当者は傷をこすり取るという恐ろしい仕事を行った。熱帯性潰瘍のため、多くの足が切断された。

絵 14：伝性病コレラ。心が麻痺するような経験である。死が日課として受け入れられるような状況である。コレラは、ちゃんとした健康体を確実な死へと導き、24時間以内に人を殺す。ジャップはこの集団殺人者を恐れた。この特別な場合、彼らは収

容所の入口をバリケードで囲み、彼ら自身が約2マイル先に移転し、医療スタッフが収容所の安全宣言を出すまでは帰らなかった。いろいろな理由で、我々は自分たちの死者を通常の穴に埋めることは許されることはなく、収容所の境界内で死体を焼却するように命じられた。これは昼も夜も続行される処置だった。死にかけている者と生きている者にとって、この恐怖は言葉に表わすことはできない。

絵 15： 恥辱。川での看護婦の出来事。これは人間がたくらむ拷問の中で最も忌まわしいものと見なされるに違いない。一人の捕虜が、日本人の‘看護婦たち’が裸で水浴をしている川に行くよう命じられる。彼は、同僚の捕虜たちが見ている中で、看護婦の背中を洗うように命じられる。彼は、‘看護婦たち’がみだらなジェスチャーをやっている川土手に呼び戻される。もしその捕虜がわずかでも性的な興奮を示したら、番兵は細いしなやかな竹で彼のペニスを叩く。その捕虜にとって、激痛と精神的な屈辱は徹底的なものだった。捕虜のある者は、開放された後でも長い間、この拷問により精神的な苦痛に苦しんだと聞いている。

絵 16： むち打ち。これは朝鮮人の番兵の間で非常に盛んであった。犠牲者は気を付けの姿勢を取り、その間、番兵が捕虜の肩の筋肉を叩き続ける。最初はその苦痛には耐えられたが、次に苦痛がほとんど止まる。ずっと、番兵は犠牲者の肩を叩く。そこで、犠牲者の肩は筋肉がほとんど耳たぶぐらいに腫れあがる。犠牲者は気を付けの姿勢を取るのを止めてもよいと言われるまで、更に1時間かそこらその姿勢を取らなければならない。しばらくして、その痛みが猛烈に戻ってくる。腫れがおさまるまで、この痛みは3日間も続くことがある。

絵 17： 竹のベッド。これは拷問のようなものではない。一人当りの寝るスペースは約2フィートであった。ベッドの底は、切って乾燥させた竹の葉(ニッパヤシの葉)で縛り、竹の棒の枠組みにしっかりと固定された割竹からできていた。竹はノミと虫に絶えずたかられた。ノミと虫の違いは区別できる。ノミは色が白く、虫は茶色がかかった赤みを帯びており、どれだけ人間の血を吸うかによる。ノミはモンスーンシーズンには絶えず脅威であった。何故なら、それを殺すだけの太陽からの熱がなかったからである。虫は無数にいて、捕えようと思えば捕らえられるが、余りにも多かった。

絵 18： 日本軍が撤退した朝。開放。この事件は、スリーパゴダスパスから遠くないタイのジャングル深くで起こった。1945年8月18日の早朝は、私は番兵に文句を言われたり、殴られることもなく便所に行った。静けさは無気味だった。私は同僚を集め、一緒になって番兵小屋へ這って行った。ジャップは見えなかった。最初、私は畏

かと思った。そうではなく、彼らは行ってしまったのだ！彼らの台所も、貯蔵品なども無かった。沢山の物が無くなっていた。これは現実なのだと気づくのに1、2日はかかった。一人の現地人がジャップは行ってしまったことを確認した。我々は再び自由の身となった。

絵 19：ジャワ 1942 年とタイ 1945 年。私はジャワ、バンダンの日本の捕虜収容所に入る。全く何も知らず、どうしていいのか分からなかった。既知の文明は即座に停止した。数分以内に価値の無い‘無’に盲従するような者に変えさせられることは表現できない。しかし、人間の精神は非常に強かったので、日本の捕虜になった者のほとんどが生きて延びた。ただ生きているというだけではあるが。ちょうど 1945 年 8 月 18 日、タイのスリーパゴダスパスのどこかだった。やせ衰え、空腹で、弱り、病気だったが、しかし幸せだった。ついに自由の身になったのだ。

絵 20：1945 年の英国空軍によるクワイ川鉄橋の爆撃。爆撃はこの主要な戦略的な橋の 2 ヶ所を粉碎し、日本軍の補給線を駄目にした。2 ヶ所の破壊された部分は戦後、取り換えられた。タイの鉄道は現在、ディーゼル車が運行しているが、ナムトク以遠はない。鉄道全線の残りの部分はジャングルを切り開いて作られている。多くの連合軍捕虜たちは鉄道線路に沿って無標識の墓の中に横たわっている。それぞれの故郷から数千マイルも離れた所に。何がどうだって、こんなに完全な人命の無駄はない。

絵 21：脱走兵の処刑。1945 年 8 月 15 日、日本は連合軍に降伏した。絵の捕虜は 8 月 16 日に脱走を企てた。これは考えただけでも馬鹿げたことだった。周りは全て未開のジャングル。地元の原住民はいつも信用できなかった、というのも犠牲者はすぐに彼らに発見された。彼は地元の原住民の一団に捕らえられ、手を後ろに縛られ収容所に帰ってきた。ジャップはそういった密告に対して原住民にかなりの金を払ったものと考えられる。犠牲者は再逮捕された後、たった数時間で銃剣により刺し殺された。この話が悲劇なのは、戦争は 1 日前に正式に終わっていたということである。ジャップがそれを知っていたかどうかは明らかにされていない。

絵 22：カンチャナブリ墓地の訪問

慰霊碑の碑文：長いとらわれの身にあつて、タイからビルマにわたる鉄道建設の間に、非業の死を遂げたあの勇敢な仲間たちの不屈の精神と犠牲を偲ぶ。

いずこで亡くなったのか分からぬ者たちは、ラングーン、シンガポール及び香港で記念碑などに名を付けて追悼される。また、戦友たちは 3 つの戦争墓地、カンチャナブリ、チュンカイ及びサンビュザヤットで眠る。

絵 23：32～35 ページを参照のこと。

絵 24：サバイバルキット。戦争が終わりに近づくと、これらの品物は鉄道で働いていた大抵の捕虜が関心を持っていた唯一の持ち物である。これらの物は命綱であった。飯盒は最も重要な物だった。人間の命を支えていくために、基本的に必要とされるもの全てに役立った。金属のスプーンは贅沢品だった、何故ならスプーンの片側を研いで物を切る道具として使えるからである。しかし、もしジャップがそれを見つけたら、スプーンは取り上げられ、持っていた者は何回も殴られる。捕虜には鋭い刃を持った物を所有することは許されなかった。最も安全なやり方は竹でスプーンを作ることだった。それはごく簡単に置き換えられるからである。竹のジョッキも簡単に手に入り、いろんなサイズに作ることが出来た。しかしながら、飲食用に使う竹の器具は、黒くなるまで完全に焼くことが非常に重要だった。何故なら、どんなに小さくても竹の切れ端が人間の消化器系統にはまり込んだら、命取りになる可能性があるからである。

絵 25 及び 26：クワイ川鉄橋を再訪。1983 年、私は妻と共にカンチャナブリ共同墓地（タイ）とクワイ川鉄橋を訪れた。それは非常に感動的で緊張に満ちた経験だった。更にそうなった理由は、その日、日本の大旅行団が到着し、その多くは私と同じ年代の人たちだったからである。彼らは昔立てた自分たちの業績をいかにも誇らしげに胸を張って同僚たちに説明していた。彼らは、鉄道建設で亡くなった者たちに捧げるモニュメントの側で写真を撮っていた。

1995年8月、ウースターのベビア・ビビス・ギャラリーで行われた展示会来訪者の
この本に対する書評：

“真実を描いてくれて有難う”

“我々が完全に理解するのに役立ちました、有難う”

“我々が忘れてはならない感動的な経験です”

“どうか、あなたの絵を通していつまでも語り続けて下さい”

“全く理解しがたいことです、有難う”

“大変感動的で、悲しい”

“気持ちを言葉に言い表すことが出来ませんが、忘れてはならないことです”

“今まで私はこのようなことが起こったとは知らなかった”

“有難う、フレッド”

Originally published by Bevere Vivis Gallery Books Ltd.

Worcester, U.K. 1995

ISBN 0 9526987 0 6

原書は1995年、英国 Worcester の Bevere Vivis Gallery Books Ltd. より出版。

また、本書は英国 Worcester 在住の Fred Seiker (フレッド・シーカー) 氏の書 'Lest We Forget' (忘れないように) を翻訳したもので、絵及び写真等は氏の許可を得て転載したものです。

Japanese edition translated by Koshi Kobayashi

Hiroshima, Japan, 2001

日本語版翻訳： 小林 皓志 (こばやし こうし)

〒729-3105 広島県芦品郡新市町下安井1383

e-mail : koshi@fuchu.or.jp

TEL/FAX : 0847-51-4346

‘忘れないように’	定価	1500円(税込)
-----------	----	-----------

2001年 5月30日	第1刷発行
-------------	-------

2001年 12月25日	第2刷発行
--------------	-------

Publisher

発行者： 小林 皓志

Printer

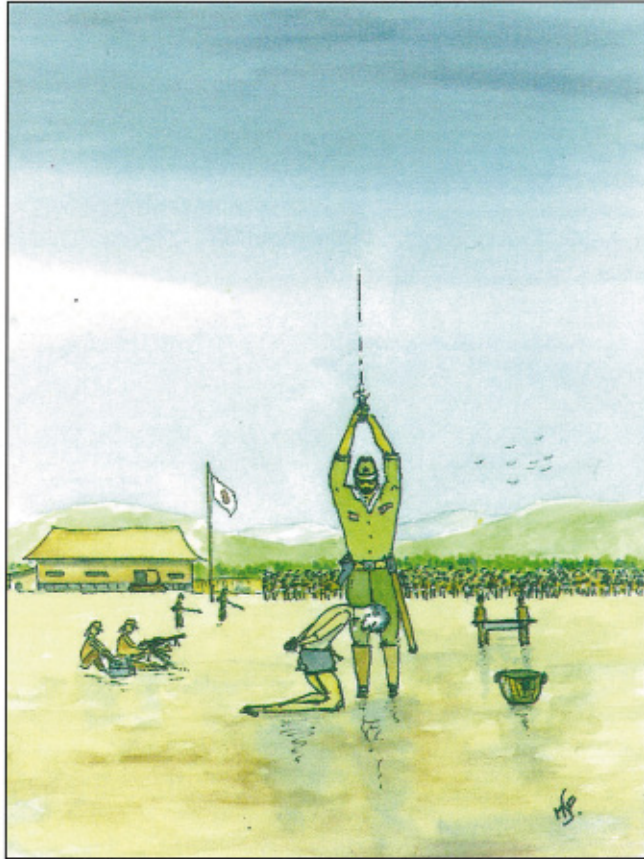
印刷所： 有限会社 オリジナルブック マイン

〒607-8079 京都市山科区音羽前出町33-1-205

TEL/FAX 075-592-8039 ISBN 4-901593-01-3 C0031

定価 1,500円（税込）

ISBN4-901593-01-3 c0031



‘武士道の騎士’

‘忘れないように’ はあの悪名高い ‘死の鉄道’ において、
著者の日本軍の捕虜としての経験を記した絵物語です。